

リーヴィスと英文学研究

——批評と「創造的」読みの戦略——

石原浩澄

はじめに ——リーヴィスの位置——

F. R. リーヴィス (F. R. Leavis) は 20 世紀中盤から後半にかけて活動した英国の文芸批評家である。歴史学、言語学、社会学、哲学その他多くの周辺領域からの知見を旺盛に取り込んだ、いわゆる批評理論が隆盛となって久しい (英) 文学研究において、リーヴィスは理論以前の批評家として位置づけられるのが通例である。ここでは、ピーター・バリー (Peter Barry) の説明を借りながら、まずこのことを確認してみよう。

バリーによれば、1980 年代を大まかな分水嶺として、英文学研究は「理論」の時代となる。多種多様な「理論」が自らの輪郭を規定するためのひとつの対照物とした、それ以前の文学研究言説のあり様を、バリーは総称的に「リベラル・ヒューマニズム」と呼ぶ (2 参照)。19 世紀から 20 世紀にかけての英文学教育・研究の制度化とも深く関連するこの伝統的アプローチは、文学が有する普遍的価値の探求、文学テキストの自律性、人間性は不変であるとの信念、などを教義として文学作品にアプローチした。なかでも、ジョンソン—アーノルド—T.S. エリオットといった著名な批評家が代表するような、個別作家の作品を「精読」していく「実践批評」の系譜にリーヴィスを連ね、「理論運動以前のもっとも影響力を持つ英国の批評家」(28) とバリーは呼んでいる。

文学作品の自律性を前提に、人間の普遍的価値の表現を文学の中に探求していく「古い」アプローチから、他学問分野の知見をも取り入れた諸理論を用いるアプローチへの移行というだけにとどまらず、そこに見られるもっと大きなパラダイムシフトを指摘しているのはノース (Joseph North) である。80 年代に文学研究において大きなパラダイムの変換が生じたとノースはとらえる。20 世紀の 70 年代に至るまで勢力を有していた陣営に対して、70 年代から 80 年代にかけて「理論」が勝利したという文学研究分野に生じた現象のとらえ方はバリーをはじめ多くの論者と共通するものだが、ノースはこの 2 陣営間の闘争を、「批評家 = critic」対「学者 = scholar」のそれとしてとらえ直している。この「批評家」という語の使い方には注意が必要になる。ノースも述べているように、今日アカデミズムにおける文学研究において「批評」というと、広く「学問的文学研究の研究活動」(“research activity of disciplinary literary studies”) (4) ととらえられ、ほぼ「文学研究」と同義に使用されているのではないだろうか。しかしながら、ノースが当該の問題をとらえる文脈においては、critic の使い方はこれとは多少違う明確な輪郭をとっている。ノースは両者のいくつかの異形態・属性の提示を試みている。そのいくつかをここに整理するなら、scholar 側に相当するのは、スペシャリスト—プロフェッショナル—客観主義—理解—事実、であり、知識を産出する科学者、と連なる。一方の critic の特性は、ジェネラリスト—アマチュア—主観性—評価・鑑賞—価値、であり、美的意識 (taste) を育む人文主義者、としてとらえられる (2 参照)。パラダイムシフトの結果優勢となった scholar 陣営による英文学研究を、ノースは歴史主義的 (historicist) / 文脈主義的

(contextualist) パラダイムとも言い換えている。文学作品の研究は、その時代の文化診断の関心事としてなされる。文化的・歴史的分析の機会として文学テキストをとらえるのだ。各種の「理論」、新歴史主義、カルチュラル・スタディーズ、ポスト・コロニアリズム、これらも scholar による歴史的／文脈的パラダイムにおける文学研究としてとらえられる。一方、critic による「批評」とは美的教育をめざす制度であり、読者の感受性や主体性を涵養することにより、文化の分析というより文化そのものにむしろ介入しようとした試みであったと述べている（6参照）。批評とは、文学という美的道具を用いて読者の能力の涵養を目指した、「道具主義的」美学であったという。

本稿の関心は、こうしたパラダイムシフトの旧世代に属する批評家 F. R. リーヴィスである。リーヴィスはまさに「批評」を強調した。（ノース自身は I. A. リチャーズを批評の旗手にとらえ、リーヴィスはリチャーズの原・批評からは変容している、ととらえているのであるが。）単に「理論以前」の批評家として位置づけるのではなく、ノースに依拠して、大きなパラダイムシフトの旧世代の英文学研究者としてリーヴィスをとらえ、文学テキストに向き合うのは文化や歴史の知識を獲得するためではなく、テキストを読むこと自体に積極的・教育的意義を見出した critic としてのリーヴィスに着目して、その読みや分析の性格を考察することが本稿の目的である。

I. リーヴィスの英文学概観 ——批評という協働作業——

本節ではまず、リーヴィスの文学批評全般にかかわる特徴をまとめておきたい。英国の大学教育全体、あるいは教養教育の中心として英文学教育をとらえていたリーヴィスは、その名も『教育と大学』（*Education and the University*）（1943）という著書の中で、近代社会という現状で教育の再生を目指すためには大学における教養教育が重要となり、その「文化的伝統の象徴」（EU 16）たる大学においては、人間的伝統を文学に求めることこそが適当であると説いた（同）。このような思考の背後にあるのは、『文化と環境』や『大衆文明と少数者文化』などリーヴィス初期の著作からもうかがえるような、現代文化の危機的状況という認識であった。西欧、特にその機械文明によってもたらされる変化のために、現代文化は過去の伝統から「断絶」されるという危機的な状態にある（FC 145-6参照）。社会では効率が重要視され、機械化によってもたらされる大量生産によって、各方面では（質の低下を伴った）標準化が進んでいく。リーヴィスが考える文化の要としての言語においても、近代文明の発達に伴う——広告等に典型的に見られるような——大衆報道や大衆文化によって、平準化とともにレベルの低下が招来する。そこで言語の洗練された使用を体現する文学——特に価値ある文学——の継承が重要となる。ただし、R. ウィリアムズの『文化と社会』（*Culture and Society*）などが的確に示しているように、このような同時代の文化に対する危機感の表現は、リーヴィスに限らず英国の思想史・批評史の中ではひとつの潮流・系譜とも捉えられる言説であったと指摘することはできるだろう。¹⁾

リーヴィスの英文学・英文科構想において中心となる学問は「批評」である。

The essential discipline of an English School is literary-critical; it is a true discipline, only in an English School if anywhere will it be fostered, and it is irreplaceable. (EU 34)

と述べて、リーヴィスは目指す英文学教育・研究の骨子を提示する。この点は重要である。なぜならリーヴィスは、当時オックスフォードを中心とするアカデミズムにおいて主流であった文献学や歴史学に基礎を置くような英文学やアングロ＝サクソン研究に基づく英文学研究の特徴だと思われる「文学についての単なる知識の習得に終わる学習」(EU 68)ではなく、文学作品を鑑賞し、評価する「批評」として、自身の英文学を規定したからである。すでに明白であろうが、上記ノースの scholar と critic の区別を想起することができるだろう。

具体的な作品の読みに基づく「批評」の実践を通して、読者・学生には実践的な判断力の獲得が期待される。先の『教育と大学』からの引用は以下のように続いている。

It trains, in a way no other discipline can, intelligence and sensibility together. Cultivating a sensitiveness and precision of response and a delicate integrity of intelligence — intelligence that integrates as well as analyses and must have pertinacity and staying power as well as delicacy. (EU 34)

このような批評訓練によって知性と感受性を涵養することは文学作品の読みにとどまらず、「相対的価値観」(EU 35)を育み、ひいては実人生における選択力・判断力の養成につながるというのである。このように、リーヴィスの英文学の特色の一つは、鑑賞・評価をしながら判断力や感受性を養うという実践的能力の獲得を視野に入れた「批評」の実践であった。

もう一つの特徴として指摘できるのは、批評実践の共同(協働)性という点である。自身の著書のタイトルにも用いている「共同探求」(“common pursuit”)などのリーヴィス用語からも察せられるように、読者や批評家の単独行為ではない批評の協働性(collaboration)をリーヴィスは重視し強調した。「批評の何が問題か」(“What’s Wrong with Criticism?”)や「文学と社会」(“Literature and Society”)等の論文においてリーヴィスが批評の問題として取り上げているのは、王立協会(Royal Society)の批評家達の批判もさることながら、むしろ、有能な「読者大衆」(“reading public”)の不在という問題である。

As addressed to other readers it is an appeal for corroboration; ‘the poem builds up in this way, doesn’t it? This bears such-and-such a relation to that, don’t you agree? In the work of an English School this aspect of mutual check — positively, of collaboration ‘in the common pursuit of true judgment’ — would assert itself as a matter of course. (EU 70-71)

And where there is no nucleus of an educated public representing such standards the function of criticism has fallen into abeyance, and no amount of improvement in the apparatus and technique will restore it. (FC 71-72)

個人による単独の解釈にとどまるのではなく、読者相互間で異なる見解を検討・検証しつつ、真の判断を追求すること。リーヴィスが考える批評にはこのことが重要であった。こうした意見交換から「具体的な相対的価値の感覚がおのずと明確に」(FC 183)なってくる。そしてこのような読者共同体における議論がコンセンサスを形成する。文学に限れば、それは(伝統に加えらるべき)文学

作品の水準を維持し、また広く文化一般に関しては、文化水準の維持を可能とするとリーヴィスは考えた。彼は、18世紀のジョンソン博士時代の「コモン・リーダー」 [= 教養ある一般読者] に憧れをもってしばしば言及する。それを20世紀中盤の時代において実現しようとして——イーグルトンに言わせれば不可能な夢であったろうが²⁾——試みたものが、自ら主宰した文芸雑誌『スクルーティニー』の読者層であり、またケンブリッジの英文科に集う学生・卒業生であったといってもあながち言い過ぎではあるまい。

リーヴィスが理想とする英文学は、「ページ上の言葉」を忠実に読むことを基礎として文学作品を評価し判断を下す「批評」であり、また、その実践は読者間の相互反応に依拠する協働の読みの作業であった、と小括することができるだろう。

II. 「読み」の実践 —— 読みの創造性 ——

では、リーヴィスの批評実践の基礎ともいえる「ページ上の言葉」に依拠した読み・分析とはどのようなものなのか。本節ではこの点を考察してみたい。

まず、1943年の「文学研究」(“Literary Studies”)というエッセイでの次の文章に注目してみよう。

We can have the poem only by an inner kind of possession; it is ‘there’ for analysis only in so far as we are responding appropriately to the words on the page. (EU 70)

着目したいのは、実際には白紙上の活字に過ぎない詩に対する、読者の反応の重要性を説いているところである。さらに少し後で以下のように続けている。

Analysis is not a dissection of something that is always and passively there. What we call analysis is, of course, a constructive or creative process. (同)

詩の分析とは、そこに受動的に存在する活字としての詩を解体するかのように読んでいく作業ではなく、より積極的・能動的な構築的・創造的プロセスだということである。

もう少しこの点をリーヴィスの著作に探ってみよう。次の引用は後期のエッセイのひとつ「批評における評価」(“Valuation in Criticism”)のなかで、上で概観した批評活動における判断プロセスに言及した一節である。

Without a many-sided real exchange —— the implicitly and essentially collaborative interplay in which the object, the poem (for example) in which the individual minds meet, and, at the same time, the judgments concerning it, are established —— the object, which we think of as ‘there’ in a public world for common contemplation, isn’t really ‘there’. (VC 278)

集約的に述べているところだと思うが、前節で確認したような協働的読みの作業の重要性を指摘し

ながら、詩の中で読者個人同士の知性が出会い、その中で判断が確立されるという。さらに、この協働的読みの作業なくしては、普通一般的にはそこに存在すると考えられている対象物 [すなわち、詩] は真には存在しない、と述べているのだ。つまり、詩は協働的読みを通して（／の中で）、成立する。

さらにこのような自らの読みの実践、すなわち、I. A. リチャーズをもって嚆矢とする「実践批評」(“practical criticism”)における分析の性質を説明しながら次のように言う。

It is a mere deliberate following-through of that process of creation in response to the poet's words (a poem being in question) which any serious reading is. It is a re-creation in which, by a considering attentiveness, we ensure a more than ordinary faithfulness and fullness. (同)

詩を読むとは、詩人の言葉に反応しつつ詩の創造の過程をたどる、再・創造のプロセスだというのだ。さらに、

The discussion, in fact, is an effort to establish the poem — the re-created poem, as distinguished from the mere text on the page — as something standing between the discussers in a common world, and thus to justify our habitual assumption that it does so stand. The poem (if I may insist on the truism) is not the text, the black marks on the paper; it's the effect of the text when this is taken by you and me — by, that is, separate minds, and yet it's not merely private. It's something in which minds can meet, and our business is to establish the poem and meet in it. (同)

討論という協働作業を通じた読み・分析によって、詩は、単なる紙のページ上のインクのしみとして刻印されたテキストを超えて再創造され確立される。それは単なる私的なものではなく、こうしたプロセスの中で個々の知性が会うことの出来る領域のようなのだと述べている。詩が成立するこの場のことを、リーヴィスは「第3の領域」(“third realm”)と呼び、「詩はそこに属するのだ」(同)と説明する。

クリス・ジョイス (Chris Joyce) はこの点に着目した。「第3の領域」とは元来ミドルトン・マリーからの借用語であり、リーヴィスはこれを独自に咀嚼して用いているという (Joyce 32 参照)。それは「文学作品の存在モード (形態)」(“mode of existence of works of literature”)を示す用語であり、「『主観的』と言う意味で私的／個人的ではなく、また、その本質が経験的に検証できると言う意味で公的でもなく、文学作品とは、協働的再創造の中にのみ存在するのである」(“[...]neither private in the sense of 'subjective' nor public in the sense that their nature is capable of empirical verification, they [= works of literature] exist only in collaborative re-creation.”) (同) とリーヴィスの読みを説明している。

マイケル・ベル (Michael Bell) はリーヴィスの言論活動を詳細かつ包括的に論じた研究者のひとりである。「生の批評」としての文学、あるいは道徳的機能の側面を強調するというアーノルド流の文学観を継承するリーヴィスの論敵はマルクス主義であったと述べ (20-21 参照)、文化批評という点において両者を対極に位置づける。「人間的価値の本質」をめぐる議論において、価値は歴史的に条

件づけられる文化的産物であり、生来的価値や本質的な人間性といった考えには懐疑的であるマルクス主義に対して、詩の価値を詩にアプリオリに内在するものにとらえるナイーブな普遍主義の本質論者ではなく、詩が経験される方法に注目する現象学的特徴や、共同体の成員による積極的な関与によって達成される文化というとらえ方をするリーヴィスにベルは着目している (21 参照)。

リーヴィスの言語観を論じる中でベルは、アーノルドら英国の文化言説の系譜だけでなく、すぐ上で述べたように、大陸系の現象学の流れにリーヴィスを組み入れようとする。特にハイデガーの言語観、つまり、単なるコミュニケーションの手段としてではなく、ものや世界を創りだす言語の機能に注目する (39 参照)。ハイデガーのいう「表現的価値」(“expressive value”) を有する言語、また、共同体の歴史的創造物としての言語は、世界を「思索以前に」(“pre-reflectively” 43) 条件づける側面を有している。特に、詩的言語には「形成されたばかりのイメージを十全に明示的になることを予防する能力」(“ability to prevent an incipiently formed image from being made fully explicit” 40-41) が存在する。つまり、「思考」(“thinking”) の特徴(機能)である「思索」するのではなく、語り過ぎずに提示するという能力を有している。ベルはこの点を、言語が経験を「演じる」(“enact”) というリーヴィスの言語観につなげている

芸術作品の創造性というハイデガーからの引用を援用しつつベルが注目するのは、「作品の保護者」(“preserver of a work”) ——文学の場合は「読者」とベルは言い換えてくれている——の役割についてである。「読者は作品を創るのではないが、なおその『創造性』(“createdness”) には属している」(47) という。それはつまり、読者は「読み」の行為を通して再・創造のプロセスに参加するという読書／読者論に通じる。これがリーヴィスのテキストのいたるところで暗示されているとベルは述べる (同頁参照)。

読みの創造性議論を敷衍すべく、ベルはそれを音楽の演奏と比較しつつ、読書行為が「批評」と呼ばれる地位を獲得するのは、それが「構成」(“composition”) の行為であるときであるという。リーヴィスの批評は「含意された構成の活動」への参加であると説明し (47 参照)、リーヴィスの「分析」に対する態度とは、テキストの「説明」ではなく、読書行為を通じた「内的なパフォーマンス」であるという。それは文学作品の創造的活動に参加することである。(“His criticism is an attempt to participate in the creative act of the work using a discourse that accepts the creative premises of imaginative literature.” 109)

したがって、読者・批評家の仕事は、詩に付与された価値や意味を見つけだすのではなく、読む行為そのものによって詩に価値を付与していくことである。通常考えられる読みの作業とは逆の機能をベルはリーヴィスの批評に認めようとする。

Of course, the poem draws on the experience of life as lived under the shadow of mortality but it is not to be explained by reflections on this. The poem is a unique experience in itself which quickens our sense of life. What has in effect happened here is a gradual reversal of the logical relation of ‘poetry’ and ‘nature’ as compared to Pope. Rather than there being an agreed order of values upon which our appreciation of poetry, and the act of composition, may be said to rest, the poem itself is now our way of engaging, of getting adequate access to, our evaluative commitments. The reading of poetry in this conception does not assume consensus. It is a way of exploring the reality, or the possibility, of a consensus. (19)

以上、ジョイスとベルという2人の研究者の論考を援用しながら、リーヴィスの読みの特徴を考えてきた。繰り返すには及ばないかもしれないが、読み・批評の行為とは、受動的にテキストの意味を紹介するのではなく、テキストの再創造のプロセスに参画することで、詩（文学作品）の意味を創造していく行為に他ならない。

Ⅲ. 「意味を創造する」読み

テキストの読み・分析において、創造的に読む、あるいは意味を創出するとは実際にはどういうことなのか。本節では具体例を探しながら確認していきたい。ここでは、筆者がリーヴィスに関心を寄せる契機となったリーヴィスのロレンス論、その中でも代表的著作であろう『小説家 D.H. ロレンス』(*D. H. Lawrence: Novelist*) を手掛かりに特徴を探ってみることにする。

結論的に言えば、リーヴィスのテキストは彼の創造的読みで満たされているということになる。『ロレンスと伝統』と題した第3章は、小説『虹』(*The Rainbow*) を論じた章である。ブラングウェン家3代の人々を壮大に描いたこの小説の特徴を「不連続であると同時に連続」(“a continuity that is at the same time discontinuity” 143) ととらえるリーヴィスは、小説中の異なる時代・世代間に共通してみられる特質を指摘する。そしてそれを歴史的に異なる時代の中で描くと同時に、世代の交代を繊細かつ有機的に提示するロレンスの筆致を称賛している。2世代目に当たるアナとウィルを論じた部分に注目してみよう。男女関係における葛藤が小説全体のテーマのひとつなのだが、殊にこの第2世代にはそれが顕著に描かれている。全体を通してその描き方は、要約して説明することなどを寄せ付けないドラマ化であるとリーヴィスは次のように言う。

Nothing would be gained by trying to summarize the argument acted out between them. It is a very impressive illustration of the originality of Lawrence's genius, and its effect is unmistakable enough. (*DHLN* 148)

詩であれ散文であれ、文学表現は要約不可能であるというのはリーヴィスの基本的立場なのだが、『虹』におけるアナとウィルの物語も然りである。説明や解説ではなく、ロレンスのオリジナリティが「例証」(“illustration”) されているところに注目せよと言う。作家あるいは語り手が明示的に注意を語るのではなく、物語が「演じる」(“enact”) というリーヴィスの主張に通じるところである。「その効果は紛れのないもの」(“unmistakable”) であるという断定は、いかにもリーヴィスらしい。ここでリーヴィスはロレンスの“illustration” のすばらしさを論じているわけだが、本稿のこれまでの議論に沿って考えれば、ロレンスのテキストのこの部分に注目しているリーヴィスの読みのストラテジーとして眺めてみるべきところである。すなわち、作者・語り手の解説や説明をなぞるのではなく、物語の「例証」や「演じること」を読み取ることで、このことが創造的な読みであり、その「例証」や「演じ」が「第3の領域」に意味を立ち上げる、ととらえることができるのである。

リーヴィスは読みを続ける。リンカーン大聖堂を2人で訪れる有名な場面である。他の箇所同様に、ここでもリーヴィスはロレンスのテキストから——本来は数ページにわたる部分であるが、短縮して引用せざるを得ないと断りつつも——長い引用をする。全体を再掲するほうがより分かりや

すいと思われるが、ここでの本稿の目的は『虹』を解釈することではないので、引用の最初のパラグラフのみの紹介にとどめたい。

Then he pushed open the door, and the great, pillared gloom was before him, in which his soul shuddered and rose from her nest. His soul leapt, soared up into the great church. His body stood still, absorbed by the height. His soul leapt up into the gloom, into possession, it swooned with a great escape, it quivered in the womb, in the hush and the gloom of fecundity, like seed of procreation in ecstasy. (DHLN 148 『虹』からの引用部分)

引用はさらに続いているのであるが、聖堂の中で畏敬の感覚、恍惚 (ecstasy) の感覚を得ているウィルを描いたこの部分を、リーヴィスは単なる一般的な「詩的散文」などではなく、「ほとんど信じがたいまでに柔軟な散文から、自然に、容易に立ち上がってくる詩」(148)と形容し、これが「関心を寄せる『概念を創造する』」(同)と述べている。引用では、聖堂の内部の様子に恍惚となるウィルに批判的なアナを描く箇所が続く。男女の駆け引き、あるいは葛藤・衝突を描いたこの部分を、リーヴィスは「詩的にドラマ化された争い」(“the whole poetic-dramatic debate”)と呼び、どちらか一方の勝利となるような描かれ方はしないが、読者が認識すべきことはこうであると次のようにコメントする。

What we have to note is that the debate is a conflict in the inner life of the married pair, and that the defeat or failure on both sides has its significance in a failure of complete ‘fulfilment’ in marriage; a failure to ‘create’ (in a phrase used later of Ursula), here in marriage, ‘a new knowledge of Eternity in the flux of time’. (DHLN 150-51)

「読者が認識すべきこと」(“What we have to note”)、言い方を換えると、このドラマ化されたテキストの意味をこのように読み取って／創出している。ウィルとアナの物語は、2人の内心の葛藤の様子であり、双方の敗北は、結婚における「成就」が達成されないことを意味している、云々、ということ、ドラマ化されたテキストの言葉から創造するということだ。リーヴィスの創造的な読みとはこのように解することができるだろう。もちろん、意味の創造が大胆であればあるほど、それは「独善的」と批判される危険を大きくはらむことは言うまでもない。

リーヴィスは、われわれが読むべき、英文学の伝統を形成する「偉大な作家」を峻別するにあたって、「[主要な小説家]は作家や読者にとって芸術の可能性を変化させるだけでなく、彼らは彼らが促進させる人間の自覚という点で、すなわち生の可能性の自覚という点で重要なのである」(GT 10)と述べているように、「生」(“life”)の表現を偉大な作家のひとつの試金石とした。“life”へのこだわりは、アーノルドの後継者とか、モラル・ヒューマニストとリーヴィスが呼ばれる所以であろうが、本稿の関心であるリーヴィスの読みの特質という点に照らしても、彼の特徴が際立つところである。リーヴィスの悪名高い批評用語の代表とも言えるこの“life”については、F. マルハーンも「至高の道徳的価値」と形容しながらも説明に苦勞したことがうかがえるが、リーヴィスは、後年の著作 *The Living Principle* において、デカルト的二項対立の論理から抜け落ちる「言語化できないもの」(“unstatable”)として“life”をとらえている。そしてその特徴を、人間の創造性、また芸術家の創造

性 (creativity) と説明している。言語の中にそれを感知することができる次のように言う。

In language, as I have said, the truth I will refer to as 'life and lives', the basic unstatable which, lost to view and left out, disables any attempt to think radically about human life, is most open to recognition and most invites it. (LP 44)

この言語使用を顕著に観察できるのが文学である。主要な文学作品の中に“life”が見られるという論理だ。してみれば、リーヴィスのテキストの創造的読みの実践のひとつの例とは、作品の中にこの“life”を読み取る、“life”の表出を立ち上げることと言えるであろう。なぜならそこに“creativity”の表現があるのだから。リーヴィスが、「偉大な」作家の文学に“life”を読み取るのも理解できるだろう。これこそがリーヴィスの創造的読みの本質であった、と言ってもいいかもしれない。そこで、最後にこの特徴の表れを再びリーヴィスのテキストに探してみたいと思う。

同じくロレンス論のテキスト『小説家 D.H. ロレンス』から、短編「牧師の娘たち」(“The Daughters of the Vicar”)を論じた箇所を例にとって見てみよう。「ロレンスと階級」という章題を付してこの短編を論じているリーヴィスの関心は第一義的にはロレンスの階級の扱い方にあるのだが、結論的にリーヴィスは本短編の主題を、「階級差に対する生の勝利」(“the triumph over them[class-distinctions] of life” 86)と端的に表現する。その「生」(“life”)とは何か、ここでもそれは物語のみが示しうると次のように書いている。

It is one of the advantages of having such a creative achievement as “The Daughters of the Vicar” to deal with that the phrase [=“the triumph over them of life”] gets its force in the tale, the movement and sum of which define 'life' in the only way in which it *can* be defined for the purposes of the critic: he has the tale — its developing significance and the concrete particulars of its organization — to point to. (DHLN 86)

「牧師の娘たち」のような物語テキストにおいて、“life”は、説明されるのではなく、おのずと意味を明確にされる(“defined”)。批評家はその貴重な物語を手にすることが出来る存在だ。言い換えれば、批評家がすべきことは、その物語から“life”を抽出してみせることである、とリーヴィスは暗示していると言うことができるであろう。そしてリーヴィスはそのような批評家(のひとり)として、「牧師の娘たち」のなかに“life”を創造的に読み込んでいくことになる。実際リーヴィスは、積極的・直接的に、かつ、消極的・間接的に、“life”の表れを読者と共有していく。あるいは、協働して意味づけをしていく。

消極的・間接的例としては、牧師一家であるリンドレイ家に見られる「上流意識」(“class-superiority”)が、「生の敵」(“enemy of life”) (87)として表れる、という言い方をしているところに注目したい。この議論では多量の引用をしているのわけではないが、リーヴィスは執拗なほどにリンドレイ家の描かれ方に負の要素を読み取る。彼らの上流意識は、「人を飢えさせるものであり、頓挫させるものであり、否定するものであり、結果として憎しみと醜さを増殖するものである」(“starving, thwarting and denying, and breeding in consequence hate and ugliness” 87)。かなり強引な「意味の創造」とも批判されかねないような論調であるが、リーヴィスは周到に読者を読み協働作

業に取り込むことによって、協働作業による意味の創造を演出するストラテジーを採用している。³⁾ さらに続く議論においては次のようにまとめている。

[...] before any statement in discursive and expository generalities, we have unmistakably, in the concrete presentment, the analysis that we associate with 'will', 'ideas', 'ideals', 'mental consciousness' and 'body'. There is no suggestion of the esoteric; it all seems, as we read, to be done in terms of ordinary observation. (DHLN 89 下線の強調は引用者による)

リーヴィスの読み・議論の方法の要諦が凝縮されているように思える部分である。「牧師の娘たち」のテキストには、作者あるいは語り手が解説的・説明的に語る以前に、具体的な（ドラマ化による）提示がなされている。それをわれわれ読者は疑う余地はない（“unmistakably”）。このドラマ化を通じた「分析」の中に、「意志」や「観念」などの特質がリンドレイ家の属性として連想されるという。リーヴィスらしい断定的論調と、読者を取り込むような共通認識の形成戦略に注目すべきであろう。しかも、このドラマ化はなんら秘儀的な様相を呈して行われるのではなく、日常を描く中で提示されていると「われわれは読める」と述べて、あらためてロレンスの手腕・手法を評価している部分と解すべきである。

これに続く議論では、リンドレイ家に迎えられる牧師 Mr Massy と炭鋳夫 Alfred との、Louisa の視点を介した対比を中心にして“life”が積極的に読み込まれる。日中に目撃した日焼けしてたくましい Alfred を思い出していると、Louisa は「誇りとともに（“with pride”）この“fine jet of life”は彼女の中をかけぬけた」（91）と感じる一方で、この時 Louisa が感じた「誇り」は、Mr Massy あるいは、彼に屈してしまう姉 Mary や母 Mrs Lindley の階級の「誇り」と対置されるものであり、Louisa の「誇り」は“a passionate sense for what is real, and a firm allegiance to it”（91）であるという。そして何が“real”なのかは、「ドラマ化のなかで具体的に定義」（91）を得ていると述べる。また Mr Massy に対する姉妹 [Mary と Louisa] の判断において、どちらの判断が“authentic”で“final”なものかは「有資格の読者であれば」了解できる、とか、Louisa の「道徳的な判断」は「間違いのないもの」（“unmistakable”）などの論じ方に対して強引な印象を受ける（リーヴィスの）読者も少なくないと思われるが、彼の創造的読みのストラテジーの一端としてここでは確認しておこう。⁴⁾

リーヴィスは“life”が具体的に明確化される場面は、牧師館と Alfred の住む“cottage”とが対比されるところだという。

[...] the way in which 'life' here — for it is the word in which what is at stake inevitably presents itself to us — gets its concrete definition is illustrated by the contrast between the vicarage and the cottage, [...] (99)

牧師館と cottage 双方を訪れる Louisa の視線を通して、それは「われわれ [読者] に偶然にも印象付けられる」（“impressed on us incidentally” 99）とリーヴィスは説明する。まずは牧師館。クリスマスの時期であり、そこには姉の Mary、その夫 Mr Massy、子供たちがいる。室内の様子は“everything was dingy with gloom”（100）などと描かれ、リーヴィスは「生を傷つけるような邪悪さはほとんど耐えられなくなる」（“the life-offending wrongness of things becomes almost insufferable” 100）と Louisa

の視点を借りて判断する。かなり強烈な言葉が並んでいる。

Louisa はそんな場所から逃げるかのように、気づけば Alfred の Durant 家の cottage の前に来ている。中を覗き込む Louisa の様子が引用されている。

Peeping in, she saw the scarlet glow of the kitchen, and firelight falling on the brick floor and on the bright chintz curtains. It was alive and bright as a peep show.

(DHLN 100 「牧師の娘たち」からの引用)

「陰鬱」(“gloom”) で “life-offending” な牧師館と、暖かく明るい「輝き」(“glow”) の「生きた」(“alive”) cottage というコントラスト。この対比において “life” の具体的なイメージは明らかだとリーヴィスは判断しているのだと思う。

おわりに

一般論として文学研究の目的や意義を問われれば、人間の創造(想像)的言語使用の表現としての文学テクストの読み・解釈において、テクストの可能性を探究し続けること、というのは答えのひとつとなりうるだろう。本稿の冒頭で触れた「文学理論」の台頭も、こうした点を踏まえれば、テクストの唯一究極の意味を求めるというよりも、まさにテクスト(=織物)として存在する文学作品の縦糸、横糸を柔軟にほぐし、そして観察しながらそのテクスト解釈あるいは利用の可能性を様々に追求する試みであるということ間違っていないであろう。こうした傾向の強い今日の英文学研究において、リーヴィスの批評手法を用いて——たとえばロレンスの——文学テクストの新たな読みの可能性を探るということはあまりない。本稿がリーヴィスに向き合ったのは、この意味でリーヴィスの復権を意図するためではない。文学研究に生じたパラダイムシフトの旧世代に属する人物としてのリーヴィスの位置を確認した上で、ある特定の時代にリーヴィスが影響を持ち得た理由なり背景を探るために、リーヴィスの言論活動の中核となる、読みの戦略の特徴を考察するというのが本稿の目的であった。⁵⁾

まず、リーヴィスの英文学の特徴について、テクストの鑑賞や評価を目的とする「批評」であるという点と、読書・批評行為の協働性という点をまとめて整理した。続いて、彼の読みの戦略や特徴についての議論を試みた。リーヴィスの読みとは、——どの程度成功しているかについての判断は留保するとして——あらかじめ埋め込まれているテクストの意味をそのまま発掘するように示すことではなく、——こういう言い方が適当ならば——テクストにドラマ化された物語から積極的に意味を創造するということであった。これが読者間の賛否の意見交換を通じた批評という協働作業の中で行われる時、「第3の領域」においてテクストの意味、さらには詩(作品)そのものが立ち現れる、という論理であった。このようなとらえ方は結局従来のテクスト解釈と同じ行為である、と主張する者もいるかもしれないし、あるいは、それは強引で独善的な解釈のための弁明である、という言い方も批判的には可能かもしれないが、本稿で参照したベルは、この意味創造の批評という点を「実存主義的」と評している点に筆者も同意して、リーヴィス批評の特徴として提示した。

筆者のリーヴィスへの関心は、作家ロレンスの評価が定まり確立されるプロセスにおける批評家

の影響を考えることから始まった。ロレンス批評に限らず、20世紀中盤における——つまり、パラダイムシフト以前における——英文学教育・研究の制度全体のなかでリーヴィスは大きな影響力を持った批評家であるということは衆目の一致するところだろう。なぜ影響を持ちえたのかという課題に取り組む前提作業と位置づけて、本稿ではひとまずリーヴィスの読みのストラテジーを議論したと言い換えることができるが、「批評」という方法、協働性をめざす企画、また意味を創造する「実存主義的」読みが、なぜ／いかに、20世紀の特定の時代に呼応したのかについて検討することで、この課題に対して今後取り組んでいきたい。そこには、冒頭で取り上げたノースの議論、つまり、リーヴィスの影響力の衰退とパラダイムシフトとの関連も検討の射程として取り込まれてくるだろう。

注

- 1) ウィリアムズは、エドモンド・バークから論をはじめ、ロマン派の論客やヴィクトリア朝期の文人たちを取り上げながら、18世紀産業革命以降の英国において、機械文明がもたらす脅威に対抗する批判として、守るべき人間性の象徴として「文化」の重要性を様々に発信した思想家たちの系譜を明らかにしている。この点のまとめについては、拙論「『リーヴィスと文化』についての覚え書き」も参照。
- 2) この点については、Eagleton、特に Chapter IV を参照。
- 3) 一人称複数の代名詞 (we, our, us) を用いた文章を多用することで、かなり強引にはあるが、こうした読みや分析を、あたかも読者と共有する協働作業として提示しているリーヴィスの戦略について、筆者は別稿で指摘したことがあった。拙論「文学批評と公共圏」を参照。
- 4) このような幾分強引な判断には、ド・マンを援用して Ch. ノリスが「美的イデオロギー」と呼んでいるような戦略——すなわち、感覚的認識から、批判的思考プロセスを欠いてすぐに価値判断へと飛躍してしまうような戦略——が垣間見られるのではないか、ということも指摘しておきたい。
- 5) この意味では、本稿ははからずも、ノースの解説に依拠すれば、「批評家」リーヴィスを扱いながらもパラダイムシフト後の潮流に乗った論考ということになるだろう。

参考文献

- Armfelt, R. N. "Education and the University" *The Fortnightly Review* (March 1953).
- Barry, Peter. *Beginning Theory*. Manchester: Manchester UP, 1995.
- Bell, Michael. *F. R. Leavis*. London & New York: Routledge, 1988.
- Eagleton, Terry. *The Function of Criticism*. London, Verso, 1984.
- Filmer, Paul. "Literary Study As Liberal Education and As Sociology in the Work of F.R. Leavis" *Rationality, Education and the Social Organization of Knowledge*. Ed. Chris Jenks. London: Routledge and Kegan Paul, 1977.
- Joyce, Chris. "The Idea of 'Anti-Philosophy' in the Work of F. R. Leavis" *Cambridge Quarterly*, Vol. 38, Issue 1 (March 2009).
- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1948; Harmondsworth: Penguin Books, 1962. (GT)
- . *D. H. Lawrence: Novelist*. 1955; Harmondsworth: Penguin Books, 1964. (DHLN)
- . *Valuation in Criticism and Other Essays*. Ed. G. Singh. Cambridge: CUP, 1986. (VC)
- . *The Living Principle*. London: Chatto and Windus, 1977. (LP)
- . *The Common Pursuit*. London: Chatto and Windus, 1952. (CP)
- . *For Continuity*. 1933; Freeport, New York: Books for Libraries Press, 1968. (FC)
- . *Education and the University*. 1943; Cambridge: CUP, 1979. (EU)
- Leavis, F. R. and Denys Thompson. *Culture and Environment*. London: Chatto and Windus, 1933.
- Mulhern, F. *The Moment of 'Scrutiny'*. London: NLB, 1979.
- Norris, Christopher. "Editor's Foreword" in M. Bell's *F. R. Leavis*.

North, Joseph. *Literary Criticism*. Harvard UP, 2017.

Williams, Raymond. *Culture and Society*. 1968; London: The Hogarth Press, 1993.

石原浩澄. 「文学批評と公共圏——『牧師の娘たち』を読むレビュー」『ロレンスの短編を読む』、松柏社、2016年。

——. 「『レビューと文化』についての覚え書き」『ことばとそのひろがり (6)』(立命館大学法学会『立命館法学』別冊——島津幸子教授追悼論集)、2018年3月。

船川一彦. 『英文科の教養と無秩序』、英宝社、2012年。

(本学法学部教授)